

# 棒高跳びの選手強化および育成に関する 米国の現状

横山 学\*

## The present situation on increase and talent training of Pole Vaulters in USA

Manabu YOKOYAMA

### Abstract

Pole Vault of USA team in the Olympics had won gold medal from the 1<sup>st</sup> to the 19<sup>th</sup>, but after 20<sup>th</sup>, they were not able to win the gold medal due to the rise of the European Vaulters. In recent years, however, Pole Vault of USA team is revitalized from the slump. This paper discusses the present situation on increase and talent training of Pole Vaulters in USA and find the way how they are revitalized. It suggests problems on increase and talent training of Pole Vaulters in Japan.

*Keywords:* The spread of Pole Vault, responsibility as top athlete

### 1. はじめに

アメリカ合衆国（今後は米国と省略する）はオリンピックにおいて第1回アテネ大会（1896年）から第19回メキシコ大会（1968年）まで金メダルを獲得し続けている。1912年以降より、C.ワーマーダムが竹ポールにおいて4m77（1942年）、G.デービスが金属製ポールにおいて4m83（1961年）、そしてD.ロバーツがグラスファイバー製ポールにおいて5m70（1976年）へ世界記録を更新するなど、この間はポールの材料が竹・金属・グラスファイバーと大きく変化した時代であり、延べ33人の男子世界記録保持者を輩出した米国は名実ともに【棒高跳王国】であった。<sup>1)</sup>しかし、その後の米国棒高跳界は長い低迷期を迎え、旧ソ連をはじめとするヨーロッパ諸国の勢力に押され、1972年ミュンヘン大会から1996年アトランタ大会までの7大会はまったく栄冠を手にはできなかった。後に、2000年シドニー大会の男子金・銀メダル、および女子金メダルを皮切りに、2004年アテネ大会の男子金・銀メダル、2008

年北京大会の女子銀メダルを獲得するなど、【米国のお家芸】は復活を遂げつつある。

日本は1932年（第10回）ロサンゼルス大会において西田修平が男子銀メダル、1936年（第11回）ベルリン大会において西田修平が再び銀、大江季雄が銅メダルを獲得した。<sup>2)</sup>しかし、それ以降メダルはおろか8位（1976年モントリオール大会）が最高である。日本も米国同様に一時代を築き衰退していった経緯から、復活を果たしつつある米国が現在どのように選手の強化および育成を図っているのかを知ることが、今後の日本棒高跳びの発展に役立つものと考えられる。

本レポートでは米国のカリフォルニア州およびネバダ州で開催された Pole Vault Camp in Mt. San Antonio College（今後は棒高跳びキャンプと省略する）、Pole Vault Summit in Reno（今後は棒高跳びサミットと省略する）に参加し、その概況を報告する。

### 2. 棒高跳びキャンプ

基本的には2泊3日の予定が組まれている。初日と最終日は半日である。まず初日に6、7人程度のトッ

\* 香川高等専門学校託問キャンパス 一般教育科



写真1 トレーニング風景

選手が試合形式で跳躍を実施し、そのパフォーマンスを観ることが最初のプログラムである。その後、能力および経験別に5～6程度のグループを作り、棒高跳びの基礎原理を簡単に説明するレクチャー、ドリル練習、補強運動、短助走～14歩程度までの跳躍練習を消化していく。このキャンプは中高生が主な対象であり、重要な部分はコーチがポイントを押さえるが、基本的には大学生およびこのクリニックを経験したことがあるOBが中心となって指導している(写真1)。

また、このキャンプは単に選手を強化することだけではなく、コーチング能力を高めることにも重きを置いている。それぞれのトレーニングにおいて注意すべきポイントを選手にわかりやすく伝えるようバーバルおよびノンバーバルコミュニケーションを用いて工夫することが求められる(写真2)。



写真2 技術指導を行なう筆者(右)

今キャンプは米国人だけでなく、メキシコ、カナダ、日本から選手が参加し、国際色豊かなキャンプになっていた。選手の取り組む姿勢と向上意識の高さは素晴らしく、熱心に質問をしている姿が印象深くあった。

### 3. 棒高跳びサミット

#### 3.1 サミット開催の経緯

低迷期の米国棒高跳び界は、選手強化を国内各地でコーチが独自に行なっていた。しかし、結果を残すことができず危機意識が高まる一方であった。そこで、それぞれのコーチが情報交換を行なう機会を持ち、選手にはクリニックで新しい知識を得、試合経験を積む機会を設けることで『USAという1つの国からよい選手を輩出していこう』という機運が高まり、1994年に第1回棒高跳びサミットをネバダ州のリノで開催し、現在に至っている。

#### 3.2 サミット開催準備

クリニックおよび試合会場は、スポーツ・コンサートおよび劇場などに使用されているLivestock Centerであった。選手として参加予定の大学生を中心に開会式2日前から11組のピット、助走路の準備がなされた(写真4)。

棒高跳びの助走路は通常、合成ゴムを固めたタータントラックを床に敷き、その上を走る。ボックス(写



写真4 クリニックおよび試合会場



写真5 棒高跳び用助走路(ボックス)

真5)は深さが20cmあり、床に埋め込まなければならないが、このセンターはそのような目的で作られてはいない。そこで、助走路そのものを20cm底上げすることで、ボックスを床に埋め込まなくてもよいように工夫されている。この方法を用いることで、陸上競技場以外の屋外で実施が可能となる。助走路そのものは、輸送およびセッティングを容易、かつ迅速に行なうことができるよう考慮されており、非常に簡易に作られている。強度については、正直なところ不安を感じるが、筆者が助走路に上がり確認したところ問題は全くなかった(写真6、7)。



写真6 棒高跳び助走路 (接続部)



写真7 棒高跳び助走路

サミット最終日には午前中に3試合、午後2試合の計5試合を11カ所のピットにおいて試合が実施されるということで、準備完了後、クリニックおよび試合の審判を行なうスタッフが集合し、指導ポイント、競技会運営、ルールについて念入りにミーティングがなされた(写真8)。

### 3.3 サミットにおけるプログラム構成

プログラムはクリニック、レクチャー、競技会の3



写真8 スタッフミーティングの様子

つから構成されている。対象は初心者からトップ選手、マスターズ、コーチ、選手の保護者と広範囲にわたっており、通常は選手のみを対象として実施されるが、コーチは当然としてマスターズ、選手の保護者にまで及んでいることに驚きを感じた。確かに、選手を最も身近にサポートする存在は保護者であり、子供に対して何をし、どのように接するかを知ることは重要である。保護者向けのプログラムを用意することは日本では考えられないことであるが、極めて理にかなっていると言える。

開会式前日は、アメリカの強化スタッフおよび外国人コーチなどを対象として有名な外国人コーチを招いての講演およびディスカッション。1日目は、開会式終了後、大ホールを含めた6会場において、それぞれの対象向けレクチャー、トップ選手と選手による座談会、レベルに応じたグループごとのクリニック、そしてトップ選手による競技会。最終日はトップ選手以外の試合が1日をかけて実施された。

### 3.4 開会式

1日目午前9時より開会式の開催(写真9)。ボブ・



写真9 開会式会場の様子



写真10 ボブ・フレイリー氏

フレイリー氏(米国棒高跳び強化委員長)(写真10)、グレッグ・フル氏(男子棒高跳びナショナルチームヘッドコーチ)、ブライアン・ヨコヤマ氏(女子棒高跳びナショナルチームヘッドコーチ)から米国棒高跳びの現状とロンドンオリンピックへの展望について話があり、このサミットの意義を強調していた。

例年、棒高跳びサミットにはテーマがあり、そのテーマに沿ってレクチャーおよびクリニックが行なわれる。筆者が参加した今年のテーマは、『棒高跳びをいかに普及し、可能性のある若い選手を参加させるか』という人材発掘についてであった。その後、この1年間における米国棒高跳び界に貢献のあった人物に対する表彰式が行なわれた。

### 3.5 レクチャー

はじめに、過去に素晴らしい成果を残した選手およびコーチの講演が行なわれた。その中でも、1999年前橋世界室内シルバーメダリストであるジェフ・ハートウィッグ選手の講演が印象深いものであった。彼は自分の生い立ちを語った上で、競技で成功した理由を「Trust your dream! Keep your dream!」という言葉で表現していた。あまりにもありきたりで、使い古された言葉でもあるが、現在に至るまでの彼の生い立ちを知れば、言葉通りに実行するためにどれほど多くの挫折を繰り返し、苦悩に正面から向き合いながら何度も乗り越えてきたのか、選手としてだけでなく人としての強さを深く感じた。

午後より、高校コーチからの棒高跳びの普及および選手育成に関する実践例の報告がなされた(写真11)。その中でも、あるコーチの発表は非常に興味深いものであった。それは、棒高跳び普及のために近隣小・中学校の運動場にピットを設置し、子供達の目の前で試合を開催するというものであった。ちなみにピットは

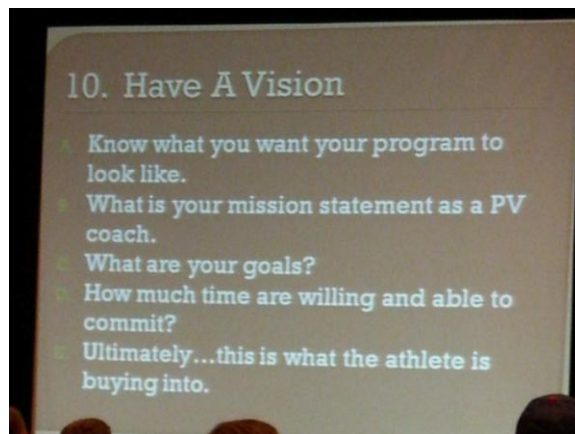


写真11 レクチャーの様子

コーチの所属する高校から輸送したものであり、準備および試合への参加者はコーチの選手である。そして、時間があれば、小・中学生に対して簡単な技術指導を行ない、ポールに触れる機会を作っていた(写真12)。棒高跳びは陸上競技の中で最もアクロバットの要素が高い種目であり、見た目が派手で、非常に人気の高い種目である。そもそも、【普及】をするということはただ伝えるだけではない。底辺が拡大し、かつ選手がその競技に定着することである。定着するまでのプロセスは、「関心を引く(例:面白そう、かついい等)→『棒高跳びをしてみたい』と思う→行なってみると楽しい→真剣に取り組んでみよう」である。小・中学生の目の前に用意することで関心を引き、跳躍をしていた選手から直接指導を受ける機会を持つことで楽しさを知る。楽しければ、夢中になって取り組む。普及へのプロセスをしっかりと踏まえており非常に理にかなったやり方である。しかも、この方法は棒高跳びをより高いレベルで取り組む意志を持つ選手が、その高校に自ずと集まるという利点がある。効率良く強化することができる上に、入学志願者を増やすことにも繋がっている点は見逃せない。幸いにも、本キャンパスが所属

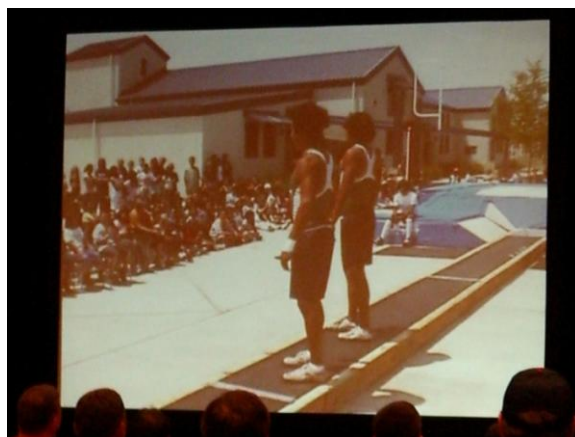


写真12 棒高跳び普及活動の一例

する香川県の西讃地域は棒高跳びが全国でも屈指の盛んな地域でもあるので、このような形で本校においても棒高跳びができる環境にあることをアピールすることは、少子化により入学志願者を獲得することに苦慮している学校の多い中で、志願者獲得の一助になりうるのではないだろうか。

国際試合における棒高跳びの平均身長は男子が190cm前後、女子が170cm強程度であるが、選手強化の考え方としては、国際試合で活躍できる選手を育成するために、陸上界の中から運動能力および体躯において棒高跳びに適正のある選手を強化していくというのが一般的である。しかしながら、この方法ではそのような資質を持った選手が現れるのをただ待つことしかできず、非効率的であり、適正を持った人材を安定して供給することが課題となる。そこで、バレーボール・バスケットボールなどからレギュラーポジションを取ることができなかった選手の引き抜きを行っていた。米国人は日本人と比較して平均身長が男女ともに5cm程度高い(男：175cm 女：162cm)。それにもかかわらず、人材獲得のために米国がそのような努力をしている事実は衝撃であった。今後の選手獲得方法には一考の余地があると強く感じる。

### 3. 5 座談会

いくつかの小グループを作り、トップ選手を囲んで直接対話をする企画である。ジュニア選手および初心者にとってはトップ選手から話しを直に聴くことができ、トップ選手にとっては未来の棒高跳び界を担うであろう選手達に対して夢を与えることのできる機会である。2000年シドニー五輪、1999年および2001年世界選手権ゴールドメダリストのステイシー・ドラギラ選手(写真13)が参加したグループを注視したが、若い選手からの技術、棒高跳びを始めたきっかけ、余



写真13 ステイシー・ドラギラ選手  
(中央左から3番目)

暇の過ごし方といった質問に対して真摯に答えている姿を見ると、トップ選手の持つ使命感、若い選手に与える影響力の大きさを改めて認識した。

### 3. 6 トップ選手による競技会

この競技会はトップ選手にとってその年最初の試合であり、他のサミット参加者にとっては目の前で高いレベルの試合を観ることができる貴重な機会である。

今年は、2000年シドニー五輪ゴールドメダリストのニック・ハイソング選手、2004年アテネ五輪ゴールドメダリストのティム・マック選手、メキシコ記録保持者であるジオバニ・ラナロ選手、女子はステイシー・ドラギラ選手、2007年大阪世界陸上で6位入賞したブラジルのファビアナ・ムレー選手らが参加した(写真14)。



写真14 トップ選手競技会における選手紹介の様子

今競技会に参加していないが、2004年アテネ五輪シルバーメダリストのトビー・ステイーブンソン選手、2007年大阪世界陸上ゴールドメダリストのブラッド・ウォーカー選手、2008年北京五輪で4位入賞したデレク・マイルズ選手、そしてジェフ・ハートウィッグ選手などの錚々たる顔ぶれが集結した。彼らは米国内における個々のトレーニング拠点から先程の座談会、クリニックにはコーチとして、最終日の競技会では審判として参加するためだけに来場しているが、『棒高跳びをいかに普及し、可能性のある若い選手を参加させるか』という今テーマの重要性を理解しており、ここでもトップ選手の責務に対する意識の高さを感じた(写真15)。

### 3. 7 トップ選手以外の競技会

最終日は初心者、高校生、大学生、マスターズというカテゴリーを性別および記録別にグループ分けした



写真15 ファンサービスをする  
トビー・ステーブソン選手



写真16 最終日における競技会の様子

上で、11ピットにおいて同時進行で競技がなされた。スケールの大きさにはただただ圧倒され、この発想に感嘆するのみであった(写真16)。

初心者(男:31人 女:46人)、高校生(男:280人 女:237人)、大学生(男:59人 女:46人)、マスターズ(男:39人 女:17人)、オープン参加(男:141人 女:49人)の計945人がエントリーしたが、高校生が全体の54.7%、初心者が8.1%の計62.8%を占めていた。このような結果からも今サミットのテーマに合致していることがよくわかる。競技会では、トップ選手が審判またはコーチ役を務め、若い選手に積極的に声をかけ、アドバイスをしていた。ここでも、トップ選手としての立場から棒高跳び界に貢献しようという気持ちが伝わった。

#### 4. おわりに

棒高跳びキャンプおよび棒高跳びサミットに参加して、米国棒高跳びが復活した理由は棒高跳びをより強

くしたいという【大きな熱意】と未来を見据えた【戦略的な人材獲得手段の合理性】にあるように思う。

開会式前日に行なわれたディスカッションでは、経験の浅いコーチや選手が自分の考えを主張し、それについて議論する中で新しいもの、より良いものを生み出そうとしていた。そして、コーチ間の情報交換(情報共有)がこの場だけに限らず、ホテルでの休憩時、食事中、あるいは競技会のスタンドにおいて頻繁になされていた。それぞれの国において棒高跳びに対する考え方が異なる。試合における選手の動きを見れば、何を目的として、どの点を重視しているのかを理解することはできるだろう。正確に言うなら、理解したつもりになることはできるだろう。しかし、それではコーチとして成長することができない。このような場に積極的に参加し、他国のトレーニング方法を自分の目で見て、その意図について彼らと直接話しをし、議論することでしか本当の理解も成長もできないのである。

また、日本が国際試合で活躍する選手の輩出を真剣に考えているならば、バレーボール、バスケットボールなどの世界で埋もれている人材の発掘を積極的に行なう必要があるのではないだろうか。米国は、北京大会の翌年に『THE ROAD TO LONDON STARTS HERE!』というスローガンのもとに4年後を見据えてすでに動いている。『どのように棒高跳びを普及し、人材を獲得していくか』というどの国もが抱える大きな問題に対して、日本の現状は無策と言わざるを得ない。棒高跳びに携わる関係者が各県においての強化に終始し、自己の県からトップ選手を輩出することにこだわることではなく、一丸となって【日本】から選手を輩出することを考えなければ、日本は世界からは完全に取り残される。現状では、日本棒高跳び復活の日がこれから訪れることもないだろう。

#### 謝辞

本視察にあたり、現地でのアレンジに最大限のご助力をいただいたブライアン・ヨコヤマ氏、元日本陸連強化委員広田哲夫氏、また訪問・滞在等に関わる米国人の方々に厚く御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 広田哲夫, 「最新陸上競技入門 棒高跳」, ベースボールマガジン社 (1989)
- 2) 結踏一朗, 「リンデンの梢ゆれて」, 出版芸術社 (1991)